

第5節 今後の授業の方向性

第2節から第4節のとおり各校種において、第1節で示した研究の視点を踏まえて実践を進めてきた。これらの実践のなかで、(研究の視点)、(研究の視点)、(研究の視点)はそれぞれ何らかのかかわりがあることが浮かび上がってきた。

これらのかかわりを整理し、各校種各教科などにおいておおよそ共通する効果的な学習の展開や指導方法が分かった。このことを踏まえ、研究の目的に沿った今後の授業の方向性として次の3点を考えた。

1 今後の授業の方向性 その1

研究の視点 において、学習交流の場を設定するという取組は、研究の視点 の共感的人間関係をはぐくみ肯定感を高めることにつながっていると考える。

このことは、自己指導能力をはぐくむための要素ともなっており、積極的に取り組む必要があると考える。

(1) かかわり合いのある学習の意味

今日の学校における重要な課題の一つは、児童生徒の主体的な学習を展開することであり、この学習を通して、自力解決の力を身に付けることが重要なことである。しかし、ともすれば、自力解決で得たことは独善的な思い込みや偏った考えに陥ることもある。

確かな学ぶ力を身に付けるためには、自分の思いや考えを確かめ合い、切磋琢磨し合っ、自分だけでは得られなかった知識や技術などの成果を得たり、より確かな考えへと鍛えたりしていくことが必要である。また、こらからの共生社会を生きる上においては、異なる考えを認め合い、よりよい価値を創造していくということが重要である。

こうしたことから、学校という多様な個性の集まる場において、学びを交流し合うことは、人間としての在り方生き方の基礎を培い、学びをより確かなものにするという意味をもつものである。単なる群としての集まりの学びではなく、一人一人が学びの主体者として集まる学習集団となり、相互理解を深め、互いに意味のある他者になることが必要である。

(2) かかわり合いのある学習から自己肯定感を実感する学習

また、かかわり合う学習によって、自分の思いや考えを受け入れられているという受容感を得たり、自分の枠を越え新しい知識や確かな認識を得たりすることができ、児童生徒に学習への肯定感を感じさせることができる。同時に、互いに認め合うことによって、共感的な人間関係をはぐくむことができる。これらを基盤として行われる学習の交流は、さらに自己肯定感を高め、学習への意欲を高めることにつながっている。

こうしたことから、指導計画に交流の場を位置付けたり、共に学ぶ学習集団を日常的・意識的に育成したり、共に学ぶための学習形態を工夫したりして、次のようにかかわり合いのある学習を学習過程に位置付けることが必要ではないかと考える。

2 今後の授業の方向性 その2

研究の視点 と研究の視点 のかかわりから考えられる学習である。

主体的な学習の条件として、自ら目標を立て、学習計画を立てるなど見通しをもち、その学習過程を通じて又はその成果を評価するという学習の流れがある。このことは、セルフコントロール学習の流れとほぼ一致していることから、次のような流れを大切にしたい学習が必要になるのではないかと考える。

(1) 目標設定の充実

児童生徒が、自ら考え自ら学ぶ主体的な学習態度を身に付けるためには、学習目標を自分自身のものとして認識していくことが必要である。そのためには、「なぜ、学ぶのか」「どう学ぶのか」「学んだことをどう生かすのか」という問いを発達段階に応じて児童生徒に投げかけていくことが必要であると考え。小学生は小学生なりに、中学生は中学生なりに自分に問いかけることを小・中・高を通して続けていくことが、学びから遠ざかろうとする現代の子どもたちに不可欠な学習活動となると考える。

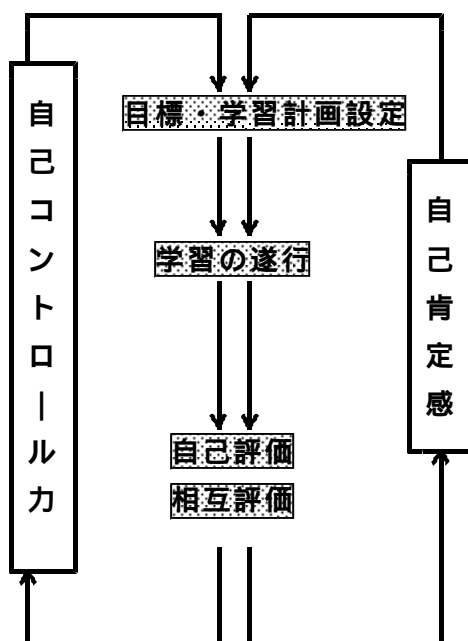
予めつらえられたルールの上を「何のために学ぶのか」考えないまま学習してだけでは、自己学習力は育ちにくい。自ら目標をもってこそ初めて、人は主体的になり、自ら工夫し、粘り強く取り組むことで、自己をコントロールすることができる。そして、その結果として何らかの成果を得ることを通して、自己肯定感を得ることができると思う。

(2) 見通し（学習計画）の充実

自ら学ぶ目標を設定したり、再認識したりすることを通じて主体的な学習はスタートする。さらに、目標達成への筋道や課題の困難度などを把握し、学習の見通しをもつことが、自ら学びをコントロールする力を育てることにつながる。

自分自身の学びに適した学習を設定したり、選択したり、教師が提示したことを参考に見通しをもったりして学習を積み重ねることが大切になる。そのためには、学習計画を立てる段階において、学習課題を明確にし、教師の適切な指導・援助のもとに学習方法や学習形態なども含めて考えることが必要である。自分で工夫した計画に従うことによって、一層主体的な姿勢をもつことができるとともに、学びを振り返り、調整することに積極的な姿勢をもつことができるのではないかと考える。

(3) 振り返りの評価活動の充実



児童生徒たちは、学習活動の自己評価や相互評価を通して、自らの学びを互いに価値付けし、自己肯定感を実感したり、学びの修正や批正などを通して自己をコントロールしたりすることができる。

しかし、形式的に自己評価させているだけでは、こうした力は育たない。まず、目標を明確にさせ、学習計画の段階から主体的な学びの見通しをもたせ、適切な時々評価させてこそ、自己の個性や創造性を伸ばすことができるという自己肯定感が実感できると思われる。同時に自分を吟味する力としての自己コントロール力が育っていくと考える。

学習過程を通し、タイミングをとらえた振り返りの活動を位置付けるとともに、評価シートなどの工夫を行い、自分の思いや考えを明確し、相互評価と

の比較によって内省力を育成することが必要である。このように振り返りは、生徒自身のメタ認知能力を育て、その認識を基に肯定感をもち、学習意欲を高め、学習をコントロールしていくことができる意味で、重要な取組である。

(メタ認知:自分の認知的な言動を客観化し、意識化してチェックしながら調整や制御を図ること)

3 今後の授業の方向性 その3

第三には、研究の視点 と研究の視点 のかわりである。

自ら学び自ら考える力を育成する重要な要素に、学び方やものの考え方を身に付けることがある。

このことは、セルフコントロールの学習における自律のためのスキルの習得(自分の行動を方向付けるスキル)と同じ考え方であり、「学び方を学ぶこと」の大切さが再確認できる。

(1) 学び方を身に付ける意味

多様な学び方の習得は、生涯学習の基盤となるものであり、今後遭遇するであろう様々な問題を解決するためのスキルとして欠かせないものである。

各教科において児童生徒が「どのように学ぶんでいくのか」という見通しをもち、その学び方を身に付けられるように学習の過程において「分かった、できた」という実感を伴う学びが必要である。例えば、調べ学習において、どのような方法があるのかを聞いたり読んだりして理解し、ふさわしい方法を選択し、適切な学習方法を認識できるようにすることである。このことは、児童生徒が試行錯誤し、交流を深めながら、主体的に学べる自己学習力を鍛えていくことにつながる。

(2) 学び方を身に付ける学習

学習に対して自己肯定感をもてない児童生徒たちは、「どう学んだらいいのかわからない」という学びの見通しや方法をもっていないことが多い。情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表の仕方、討論の仕方などの様々な学び方を身に付けることで、自ら学ぼうとする自信をもつことができ、学ぶ意欲を高めることができる。同時に、問題解決の見通しをもって学習に当たることで、「調べ直しが必要だ」「二つの考え方で試そう」など学習を調整する力も高められる。

以上、3つの研究の視点が、互いに重なり合ったり、関係があると考えられることについて述べてきた。各校種、各教科等の実践には、これら3点だけではなく様々な手法が取り入れられた研究の方向が提案されている。それらは、次年度以降の研究のなかで広がりをもつものとする。

今後の実践研究の方向性として、授業改善の課題と方向を明らかにしながら、自己コントロール力をはぐくみ、自己肯定感を実感させる視点をもち、これらを両輪として実践的な研究を進めていきたい。